



『この世は無常なり ゆゑに 眞実にこそ 目覚めよ』

この言葉はお釈迦さま最後のお説法の中の教えです。

「弟子たちよ、わたしの終わりはすでに近い。別れも遠いことではない。しかし、いたずらに悲しんではならない。この世は無常であり、生まれて死なぬものなどない。わたしの身が朽ちた車のように壊れゆくさまから、この無常の道理に気づき、人の世の眞実のすがたに眼を覚まさなければならぬ。変わりゆくものを変わらせまいとすることは道理に反する。

すべては変化していくが、それをも含めて変化しないものがある。そう、眞理である。国や時代が変わったとしても永遠に変わらぬ眞実に目覚め、それこそをよりどころとして励まなければならぬ。

煩惱の賊は常におまえたちのすきをうかがって、苦しめようとしている。もしおまえたちの心の部屋に毒蛇が棲んでいるのなら、その毒蛇を追い出さない限り、落ち着いて眠ることはできないであろう。煩惱に従わず、よくととのえた正しい心の主人公とならなければならぬ。これわが最後の教えなり。」（世尊遺教経より抜粋）

二月十五日はお釈迦さまが亡くなられた日です。死というより涅槃に入ると申しますが、肉体は変化しても永遠に変わらぬ眞理そのものに遷られたと申しましょうか。

西行法師のお歌が思い起されます。

「願わくは 花の下にて 春死なん その如月の 望月のころ」

（釈尊の如く春の花咲く満月のころに死なせてほしい。二月の十五日あたりに…）  
お釈迦さまを真に慕い尽くされた西行法師のせめてもの思いが伝わる美しい短歌です。で、その願いの通りに西行法師はお亡くなりになられたのです。

## 【正光寺に伝わる涅槃図をご紹介します】

### 涅槃図（ねはんず）とは…

お釈迦様は 35 歳で悟りを開かれてから 45 年間、インド各地を行脚して仏法を説き広められました。そして 80 歳になって生れ故郷へ向かう途中、純陀（チュンダ）が供養した茸に中毒して体調を崩し、クシナガラのお提河のほとり、沙羅双樹のもとで亡くなりました。その模様は『涅槃経』という経典に記されていますが、それに基づいて描かれたのが仏涅槃図です。

涅槃とは梵語のニルバーナを漢字にあてた語で、「消滅する」という意味ですが、すべての煩惱が消滅して悟りを完成させた境地を指します。釈尊の死を「涅槃に入る」というのはそのためです。図の中央に宝台に横たわるお釈迦様が描かれ、涅槃経に記すように「頭北面西右脇（北枕・右脇下・西向き）」で、大寂静の涅槃の境地で全身が金色に輝いています。

正光寺のこの涅槃図の筆者や年代などは残念ながら不明ですが、縦 216 cm×横 90 cmの掛け軸となっています。



- ◆天地宇宙のあらゆる仏神から弟子・鳥獣・虫に至るまでがお釈迦様の死を悼み、嘆き悲しんでいる様子が描かれています。中でも宝台の下で悲しみのあまり悶絶しているのが、十大弟子のひとり阿難尊者です。
- ◆お釈迦様は生後7日で母親を亡くされます。その亡きお母様が天上の忉利天から天女を従えて駆けつけました。
- ◆お釈迦様の奥には8本の樹（沙羅双樹）が見えますが、釈尊の死への悲嘆からか突如4本が枯れてしまったといわれます。しかし残る4本はお釈迦様の教えが永遠に語り継がれるように、より栄んに咲いたと言われていました。現代の葬儀でも白い4本の樹（四華花）を立てるのはこの故事に由来します。釈尊入滅は二月十五日でしたから空には満月が照らしています。
- ◆人々の中で供物を持っているのが純陀です。お釈迦様は彼から受けた食事が元で亡くなったと伝えられており、容態が悪化するお釈迦様を見た阿難尊者は、純陀の食事を受けるべきではなかったと嘆きます。しかし、お釈迦様は「私は彼の食事によって寿命を迎えることができた。臨終の前に食事を捧げることは最も尊い行いなのだ」と諭しました。この言葉には、純陀を思いやる慈しみの心と、死は厭うべきではないという仏教の教えが表現されています。